

# 天保十四年の キャリーオーバー

五十嵐貴久

## 第八回

九

三味線の音が響いていた。少し前から支度部屋したくに五人の芸者が入り、客たちに酌しやくをして廻まわっていたが、それも一段落着いたのだろう。始まっていたのは陽気な金毘羅船こんびらふねの曲である。

金毘羅船

追風おいてほに帆かけてしゅらしゅしゅしゅ

まわれば四国は讃州さんしゅう那珂なの郡象頭山ごおりぞうずさん

金毘羅大権現だいきんげん

柳橋やなぎばし辺りの芸者だろう、と團十郎だんじゅうろうは思った。芸者の売りは色香

ではなく芸とされているが、そこは魚心うまごころあれば水心みずこころで、客たちに媚態たいたいを示す女もいたが、相手をする者はいなかった。

それどころではない、というのが本音なのだろう。間もなく、湯

島千両富とめふたの留札、その頭の文字がわかる。

芸者が婉然えんぜんと微笑ほほえんだところで、それが何だというのか。腹のう

ちはそんなところに違いない。

團十郎ちよこは猪口そぞに注がれた酒をこつそりひと口なめた。僧ほうりようの法良

は下戸だが、今日ばかりは飲んでも誰も咎とがめまい。自分のことで精

一杯で、他人に気を配る余裕などないはずだ。

それも当然の話で、懸かかっているのは取り置き金の百万両、そして褒美金ほうびきんの二十万両である。金さえあれば、芸者などいくらでも買える。

豪商きのくにやがんざえもん紀伊国屋文左衛門が柳橋の芸者を総揚そうあげして、一夜で一両使ったという伝説があったが、それどころではない大金だ。

女より金、というのが陰富に加わっている賭け手たちの偽らざる

心だった。

「失礼つかまつります」

襖ふすまの向こうで男の声がした。湯島から使いの者が戻ったのだろう。

「湯島千両富、頭かしらの文字は何か？」

鳥居とりいの問いに、松にごさいます、と襖を半分ほど開けた男が答え

た。

与力よりきの大迫おおとこです、と客たちに向かって鳥居が笑みを浮かべた。

「先例にない、留札の番号は大迫が伝えます。皆様方も一緒に聞かれた方が、何かとよろしいかと存じます」

松、と数人の男が手元の陰富札に目をやった。

今日、鳥居の陰富の賭場とばに集まった九人の客が、それぞれ大金を投じ、数十枚、あるいはそれ以上の陰富札を買っていることは、團十郎もわかっていた。

それぞれの札の番号はわからないが、頭の文字だけについて言えば、松竹梅福祿寿の六文字だけである。

ざっくりした言い方になるが、六枚買えばそのうちの一枚は松であってもおかしくない。

例えば寛永寺かんえいじの住職がそうだったように、ひとつの文字にこだわって、陰富札を購入した者もいるかもしれない。だが、それは少数だろう。

多くの場合、博奕ばくちを打つ者は大きく網を張る。数枚ならともかく、何十枚、百枚以上の陰富札を買うのであれば、頭の文字を分散して望みを託すのが人情というものだ。

(師匠はうまくやったようだ)

手にしている十枚の札に目をやった。頭の文字はいずれも松であ

る。

その後には、七、ト、そして空（〇）から九までの文字と数字が記されていた。

実際に湯島天満宮で突き手がどの頭文字を突いたのか、それはどうでもよかった。談志、お葉、その他力を貸している何百人もの連中が、鳥居の手下をいかにして足止めするか、そこにすべてが懸かっていたが、とりあえず、最初の一人はうまくいったようだ。

どうかね、と隣に座っていた白山屋の番頭、伸輔が團十郎の手元を覗き込んだ。

「十枚買ったと言っていたが、その中に松はあるのかい？」

何とか、とだけ團十郎は答えた。そりやそうだな、と伸輔がうなずいた。

「一枚、二枚は松があつたっておかしくない。こつちも同じだ。ひい、ふう、みい……二十枚ほど松がある。さて、ここからどうなることやら」

楽しみでございますねと頭を下げて、團十郎は膳の冷や奴に箸をつけた。

勝蔵かつぞうの弟、時蔵ときぞうは足を強く踏ん張った。後ろから大勢の者が押し  
ている。

前に出たつてしようにがねえだろうと怒鳴どなったが、聞く耳を持つ者  
は誰一人もいなかった。

(無理もねえ)

振り返ると、誰もが富札を握り締め、目を血走らせていた。必死  
でかき集めた金で、ようやく一枚だけ富札を買ったのだろう。

留札が当たれば千両が手に入る。夢のようなというよりも、夢そ  
のものというべき大金である。必死の形相になるのも、やむを得な  
い。

(場所取りを間違っちゃまったな)

時蔵は近眼ちかめで、離れていると文字が読めない。二度目の百突きが  
始まっていたが、札を突くたび神主かみぬしが文字の記された富札を高く掲  
げ、その文字を叫ぶ。

だが、人々の大声にかき消され、神主の声は聞き取り辛かった。  
やむなく前に出たが、人波に押されて身動きが取れなくなっていた。  
すべての文字を書き写すように、と鳥居から命じられていたが、

それどころではない。立っているだけで精一杯である。

その時、白装束しろしょうぞくの突き手が、百という神主の声に従い、富箱きりに錘きりを突き入れた。

刺さった富札を取り上げた神主が、そのまま四方に向け、又、と叫んだ。イロハニホヘトチリヌ、のヌである。

懐ふところから十手を取り出し、静かにしやがれと怒鳴った。十手は岡じつてつ引きだけが所持を許されている。

武器でもあるが、身分を示すための道具でもあった。周りにいた者たちが、怯おびえたように一歩下がった。

どけどけ、と十手を振り回しながら、人込みをかき分けて境内けいだいの外に出た。

見渡す限り、人の波が続いている。江戸中の者が湯島天満宮に集まっているのではないか、と思えるほどの大群衆だった。

帳面に筆で「ヌ」とひと文字書き、懐に突っ込んだ。後は南町奉行所まで突っ走るだけである。

足早に半町ほど進むと、ようやく人波が途切れた。師走しわす、晦日みそかだというのに、滝のような大汗が背中を伝っていた。

「おっと、ごめんよ」

角を曲がったところで、職人風の初老の男と肩が触れた。

岡つ引きは正式な武士ではなく、あくまでも公儀こうぎの役人である同どう

心に雇われているだけの身だが、非公認とはいえ奉行所で働いているため、一般には武士階級に属していると見なされていた。

町人と肩がぶつかった場合、頭を下げるのは町人と決まっているが、岡っ引きは帯刀を許されていないため、普段は町人と変わらな  
い格好である。

面倒事を避けたいという思いもあり、気をつけろとだけ言って、その場を離れた。

江戸の職人は気が荒いことで知られている。喧嘩となれば、一歩も引かないだろう。歳は五十かそこらだが、腕っ節も強いようだった。

歴れつきとした武士ならともかく、岡っ引きが相手なら、何をしてくるかわからない。火事と喧嘩は江戸の華という。時蔵も気が短い  
が、今は関わりあっている暇などなかった。

振り向くと、職人が肩を揺らしながら角を曲がっていくのが見えた。

何もなくて良かったと歩きだした時、上品な着物を着た女が小走りに近づいてきた。

歳は三十前ぐらいか、頬に薄く白粉おしろいを塗り、唇には紅べにを差している。美人画から抜け出てきたような、色っぽい女だった。

「これはお兄さんのじゃないのかい？」

差し出したのは、表紙の黒ずんだ帳面だった。慌てて懐を探ると、そこには何も入っていなかった。

「すまねえ、落としちまったようだ」札を言って、帳面を受け取った。「さっきの野郎とぶつかった時だな。きれいな姉さんに拾ってもらって助かったよ」

上手いこと言って、と女が時蔵の肩を軽く叩いた。

「あたしもね、お兄さんがいい男だから、何となく気になってたんだよ。これを落としたのが見えたから、追いかけてきたってわけ。礼なんかいらさないよ。それじゃあね」

そうはいかねえ、と時蔵は財布から錢を取り出し、女の白い手に握らせた。

「この帳面は大事でな。なくしちまったら、えらいことになるところだった。あんた、名前は？」

お紺、と女が微笑んだ。

「両国のきつねやって茶屋で働いてるから、暇があつたら来ておくれよ。お兄さんみたいないい男なら、いくらでも御馳走ごちそうするからさ」  
気が向いたらな、とだけ言って時蔵は手を離した。きつねやお紺だよ、と女が背を向けて去っていった。

(いい女だ)

胸の内ですぶやいて、足を速めた。遅くなれば、鳥居にどれだけ



叱責しつせきされるかわからない。

湯島から南町奉行所まで、駆けるように進み、門の前に着いた時には息が切れていた。

「どうした、何をそんなに慌てている」

門衛の与力が膝に手をつけて息を整えている時蔵に声をかけた。

申し訳わけございませんと頭を下げると、次の文字は何かと耳元で与力が囁ささやいた。

表立って加担はしていないが、鳥居の命で陰富に手を貸している一人だった。

「ええと……ちよいとお待ちを」

時蔵は懐の帳面を取り出し、頁をめくった。最後の一枚に、ハ、とひと文字記されていた。

（又、ではなかったか？）

一瞬そう思ったが、記されている文字は確かにハである。人込みをかき分け、湯島天満宮の外に出たところで、自ら帳面に文字を書いたのは覚えていた。

又だったというのは、思い違いだろう。あれだけの大賑おほにぎわいだっただから、忘れないうちにと文字を記しておいた。不確かな記憶より、よほど確かというものだ。

「ハ、ににございます」

少し待っている、と与力が竹筒を渡した。中に入っていた水を飲むと、顔中に汗が浮かんだ。

十一

「どうだった、お藍」

簡単だったよ、ときつねやお紺こと、お藍が紅を拭いながら言った。

そのままでもいいんじゃないか、と初老の男が言ったが、似合わないからねとお藍は微笑んだ。

「さすがだねえ、銀さん。惚れ直したよ」

久しぶりで手が震えた、と銀次ぎんじが答えた。稲妻の銀次ぎんじといって、江戸でも名人級の掏摸ナマリである。お藍はその女房だった。

「足を洗って十年経つが、体が覚えてるもんだな。勝手に指が動いてくれた」掏摸取るといっても帳面だしな、と銀次が笑った。「財布なら誰でも用心しているが、帳面なんざ気にしちゃいねえ。あんな阿呆面あほうづらだ、お安いご用だよ」

これで矢部様やべへの恩は返せたのかねえ、とお藍が首をかすかに傾けた。まだ足りねえかもしれない、と銀次が顔をしかめた。

十年前、仕事をしていた銀次が奉行所の与力に捕まった。当時の

町奉行は無期の所払いを命じたが、銀次に病身の母親がいることを知った当時の町奉行直属の下吏かだった矢部定謙さだのりが罪一等を減じ、手鎖くさり百日というこゝで穩便に処置した。銀次も拘摸を止めると誓い、今日までその指を使ったことはなかった。

だが、その定謙の仇討あだうちと咄家はなしの談志に聞かされ、恩返しのためならと久々に腕をふるうことを決めた。

目明かしの懐中の帳面を掏摸取り、一枚破ってハと記してから、それを女房のお藍に渡せばいい。後はお藍がうまく話をつけるはずであったし、その通りになった。

「万事うまくいくといいな」

大丈夫、とお藍がうなずいた。

「矢部様が見守って下すってる。ちゃんと帳面の字だって書き換え  
たんだし」

帰るか、と銀次が手を伸ばした。あいよ、とお藍がその手を握りしめた。

## 十二

「次の文字は“ハ”に相成りました」

鳥居は目の前にあった半紙に、墨痕ぼっこん鮮やかにハの字を書き、全員

に示した。僅わずかなどよめきと、舌打ちの音が重なった。

「頭の文字は松、そしてハ。次は数字となります。今頃、湯島天満宮では百回突きが始まっておりますでしょう。空（〇）から九まで、十の数字がございます。どれになるかは運うん否ふ天賦てんぷ、今しばらくお待ちいただければと——」

女たちを下げよ、と鳥取藩江戸家老、河田景与かわだかげともが喚わめいた。

「女も酒もいらぬ。膳部も片付けてもらおう。ここまできれば遊びは無用。そうではないか」

河田のこめかみに青い筋が浮かんでいた。先ほどまでは多少余裕がある様子だったが、形相が変わっている。

「どうやら、河田様は松のハの陰富札をお持ちと察しますが、いかがでしょう……いや、お答えいただけなくても結構。確かに芸者衆げいしやしゆの出番は終わったようでございます」

下がれと顎あごをしゃくると、数人の芸者が支度部屋を出て行った。最後に残っていた老芸妓げいぎが、これでおしまいと三味線を鳴らして、その後続いた。

「とはいえ、河田様。次の知らせが入るまで、早くとも半刻（一時間）はかかります。湯島とこの南町奉行所は離れておりますゆえ、そこは致し方なきところ。酒でも飲みながら、お待ちいただけますか」

陰富札を握りしめた河田の手が、激しく震えていた。お座り下さ  
いと重ねて言うと、大きな尻を座布団に落とした。

鳥居は背後に目を向けた。襖が半寸（約一・五センチ）ほど開い  
ていたが、その奥では、蛭仁ひるじんが六万枚の陰富札を整理している。

まず、松竹梅福祿寿の六段に分け、その後イロハ、数字、イロハ、  
数字の順に配置しているが、頭の文字が松とわかった時点で、それ  
以外の陰富札はすべて処分することになっていた。

今回で言えば、松以外、竹梅福祿寿の五万枚はすべて不要となっ  
た。残りは一万枚である。

それを蛭仁が並べ直し、イロハニホヘトチリヌ、の行に分けてい  
る。次の文字が「ハ」と決まったため、他の文字の陰富札も捨てる  
段取りになっていた。

幸い、刻とぎは余るほどあった。どれほど急いでも、目明かしたちが  
湯島から奉行所へ来るまで、半刻はんこくはかかる。それだけの刻があれば、  
不要な陰富札を捨てるには十分だった。

鳥居は自分が持っている陰富札を確かめた。三百枚買ったと客た  
ちに伝えていたし、実際に三百枚が手元にある。

ただし、それは適当に選んだだけで、当たつていようが外れてい  
ようが関係ない。番号さえ、ろくに見ていなかった。

重要なのは、最終的に持っている札の一枚と、湯島千両富で留札

となる番号の札をいかにうまくすり替えるかだったが、それについても不安はなかった。

陰富札は薄い紙片で、一分（約三ミリ）の隙間があれば、そこを通すことができる。

留札が決まれば、蛭仁がその陰富札を襖の隙間から鳥居に渡すことになっていた。すり替えるというより、受け取るだけである。

襖を背に、手を後ろに回せば、それで済むのだから、これほど確かなイカサマはない。

最初から、鳥居は賭け手たちに取り置き金の百万両を渡すつもりなどなかった。

褒美金の二十万両については、今後他の当たり籤くじを含め、払い戻し金もあるし、外れた者たちの不平不満をなだめるために使うことにしていたが、百万両は別である。

そのために取り置き金という定めを作っていたのだ。一銭たりとも、誰かに渡すことなどできるはずもない。

金こそが力である、というのは鳥居の中で絶対的な信条だった。信仰、あるいは戒律かいりつといってもいい。

ただ、問題がないわけではなかった。特に不安なのは、河田景与であった。

河田に限ったことではないが、多くの賭け手が公金を流用して陰

富に大金を投じていた。

今日が最後の陰富であり、ここで敗れば、金を取り戻すことは絶対にできない。外れたとなれば、何をするかわからなかった。

もつとも、そのための配慮はしていた。賭け手たちは賭場に刀を持ち込んでいない。奉行所に入る時、与力衆に預けていた。

不測の事態を防ぐため、今までもそうだったし、どこの賭場でも同じである。

刀がなければ、豪力無双と恐れられている河田であっても、暴れようがないだろう。

また、支度部屋の外には与力、同心を数十人控えさせていた。河田を含め、他の賭け手たちが騒ぎだせば、取り押さえる手筈である。

そもそも、陰富は幕府によって厳しい禁令が敷かれている。加わっている者たちは、他言することができない。知られば、己が罪に問われるだけである。

そればかりか、河田のように位の高い者なら、最悪の場合藩を取り潰されることさえ考えられた。諄々じゆんじゆんと説けば、損得を悟り、おとなしく去っていくだろう。

(ただ一人を除いては、だが)

鳥居は顔を上げた。視線の先に、僧衣を着た團十郎がいた。

(あやつは何を考えているのか)

鶴松つるまつを捕らえた以上、策などあるはずもない。何もできぬまま、この場を去るしかないのだ。

気にすることは無い、と鳥居は首を振った。

所詮しよせんは下賤げせんな歌舞伎役者に過ぎない。行きがかり上この場にいるが、何をどうすることもできないはずだ。

はずだ、と思ったが、一抹いちまつの不安があった。團十郎が何を考えているのか、いかに鳥居でも腹の内が読めなかった。

### 十三

太鼓たいこの鳴る音が大きく響いた。三度目の百回突き、その最後の合

図だ。

霞かすみの幸助こうすけは固唾かたずを呑んで突き手の姿を見つめた。目隠しをしているため、どこを突けばいいのかわからないようだ。

神主が体を支え、耳元で囁いている。うなずいた突き手が、まっすぐ腕を振り下ろした。

引き抜いた棒の先に、一枚の富札が刺さっていた。

「四！」

それを取り上げた神主が叫んだ。静まり返っていた湯島天満宮が、一転して大騒ぎになった。



留札は松の又の四の順である。残るは後二つの文字と数字だ。境内の至るところで、喧嘩が始まっていた。松の又までは、数千人がその札を持っていたはずだが、この段階で数百人に絞られたことになる。

外れたとわかった者が、周囲に当たり散らし、それが喧嘩沙汰ざたになっていくのだろう。

幸助もその一人だった。なけなしの金で数枚の富札を買っていたが、すべて外れ籤となってしまった。

腹を立てている者たちの気分はよくわかったが、それはそれ、これはこれである。

今は一刻も早く南町奉行所に戻り、四という数字を伝えねばならない。それが奉行の鳥居からの命令である。

境内の端の柵を乗り越えて外に出た。老若男女、誰もが湯島天満宮を目指している。

入るのは簡単だったが、出るのは至難の業わざだった。とにかく人が多い。

それでも、どうにか人込みを抜け、表通りに出た。次から次へと路地から人が湧わいて出てくるが、歩く邪魔にはならなかった。

(急がねえとな)

草鞋わらじの紐ひもを結び直し、どけどけと大声で叫びながら十手を振り回

した。

「ご公儀ご用である。下がれ、下がれ！」

怯えたように、道行く者たちが軒下に退いた。本を正せば、岡つ引きは無頼の徒である、と江戸市中の者なら誰でも知っていた。

何があつたのかはともかくとして、下手に邪魔立てすれば、どんな因縁を吹っかけられるかわからない。

どけどけ、と叫びながら走りだした。道は一本である。

全力で走れば、半刻ほどで着くが、約一里（四キロ）あるから、走り続けることはできない。

速足で歩を進めると、清水坂下に出た。二台の大八車が、大きな桶を移し替えていた。

独特の臭気が鼻をついた。汚穢屋である。糞尿などの汚穢を汲み取り、農家に売るのがその仕事だった。

（無茶をしやがって）

道の端に身を寄せながら、幸助は唾を吐いた。天下の公道で糞尿の入った桶を移し替えるとは、どういう料簡か。

しかも、一人が二つ、あるいは三つの桶を担いでいる。見ていて危なっかしいことこの上なかった。

止める、と十手をかざして幸助は叫んだ。

「南町奉行所、城山同心から十手を預かっている霞の幸助ってもん

だ。邪魔だ、そのまま下がれ。動くんじやねえぞ！」

「こいつはとんだ失礼を」汚穢屋の頭領とうりょうなのか、年かきの男が幸助に近づいて頭の手ぬぐいを取った。「申し訳ございませぬ、大八車の輪が外れ、やむなくこのような次第に……おい、皆の衆、動くんじやねえぞ。南町奉行所の旦那がお通りになる。汚穢しがきの飛沫ひとつでもかかっちゃったら、迷惑をおかけすることになるでな」

へい、という返事と共に、その場にいた十人ほどの男たちが平伏した。その後何が起きたのか、幸助にはわからなかった。

突然、車輪が外れ、大八車が傾くのと同時に重ねられていた桶が跳ね飛んだ。

宙を舞った桶が計ったように幸助の頭上で引っ繰り返り、中の糞尿がそのまま降ってきたのである。

避けようと飛び下がったが、場所が悪かった。そこに汚穢桶を担いだ男が立っており、ぶつかった拍子に桶の中身を全身に浴びるところとなった。

「てめえら、何をしゃがる！」

何も見えねえ、と幸助は両手で顔を拭った。凄まじい臭いである。

「畜生ちくしょう、染みやがる。顔が痛え……おい、どうしてくれるんだ。こっちは岡っ引きだぞ？」

とんだことを、と頭領が手桶の水を幸助に浴びせた。

「ともかく、顔だけでもお洗いくだされ。このようなことになろうとは思ってもおりませなんだ。おい、誰か水を持ってこい……申し訳ございませぬ。お体を洗いますので、少々お待ちくだされ。いや、それにしてもこいつは参りましたなあ。着物が汚穢だらけで、とても使い物にならぬでしょう」

馬鹿野郎と怒鳴りつけて、幸助は着物を脱ごうとしたが、糞尿が張り付いてうまくいかない。おまけに目も開けられないのだから、どうにもならなかった。

何とか禪ぜんじひとつになったが、その禪も黄色に染まっていた。

「こんなことをしてる場合じゃねえんだ。おれは今すぐにも奉行所に戻らなきゃならねえんだよ！」

ごもつともでございませぬ、と頭領が何度も頭を下げた。

「ご公儀のご用でございませぬ。それはわかりますが、この格好ではとても……いかがでございませぬ、お体を洗われ衣服を替えてから、奉行所へ向かわれるということでは……」

畜生、と喚いて幸助は禪を外した。そこに頭領が水をかけた。

「申し訳ございませぬが、手桶の水ではこれ以上どうにもなりません。幸い、知り合いの裏長屋が近くにありますので、そこで井戸を借りてはいかがでしょう。その間に着替えも用立てておきます。何でしたら、こちらの方から南町奉行所に使いを出して、何があった

かお伝えすることもできますが」

とにかくこの臭いを何とかしろ、と幸助は大声で叫んだ。

「くそつたれが、何てことをしやがる。体中に糞の臭いがこびりついて、取れやしねえ。鼻が曲がっちゃうよ！」

申し訳ありません、と頭領が繰り返した。

「いつもお世話になっている親分さんに、とんだ失礼を……わたしらの素っ首そくびでよろしければ、今すぐ切り落としていただいても構いませんぬ。さあ、どうぞ」

そうしてやりたかったが、刀を持っていないので、幸助は誰のこゝとを斬ることもできない。

悔し紛れに十手を振り上げたが、目を開けられないため、空しく空を切るばかりだった。

「おい、どうにかしろ。聞いてんのか、この野郎！ 返事をしやがれ、どこへ行きやがった？」

糞尿のべっとりついた指で右目だけを拭くと、そこにいたのは呆気にとられたように見つめている町人たちだった。

汚穢屋の姿はどこにもない。逃げてしまったのか。

「誰か助けてくれ！ どこか水のあるところに連れていけ！ おい、井戸はどこだ？」

小石が飛んできた。右目だけで見ると、子供たちが嘔はし声を立て

ながら、石を投げつけていた。

「裸のおじさん、糞まみれ。臭くて臭くて近寄れぬ」

このガキ、と手を伸ばしたが、通りかかった娘たちが悲鳴をあげて股間を指さした。

素っ裸だと我に返り、幸助は慌てて両手で股間を押さえた。

#### 十四

七にございます、と与力の大迫の低い声がした。

相違ないか、と鳥居が問い返すと、幸助の使いの者からの言伝ことづてゆえ間違ひありませぬ、と返事があった。

松、ハに続き、鳥居が半紙に「七」と筆で書いた。團十郎は無言でその様子を見つめていた。

己が持っている陰富札は、松・ハ・七・ト、そして空から九までの十枚である。談志とお葉はうまくやっているようだ。

このまま段取り通り進めば、当たりの留札を自分が引き当てることになるだろう。

(そこまではいいが、その後どうなるのか)

鶴松の読み通りなら、鳥居は総替そうかえノ法ほうのイカサマを使うはずである。

続きの間になっているもうひとつの支度部屋には、別に六万枚の陰富札が用意されているのだろう。

その中から、目明かしの一人がたった一枚の留札を抜いて、鳥居に渡す手筈になっているはずだ。その場合、留札が二枚出ることになる。

團十郎の手の中にある陰富札は、鳥居とその手下が作った真の陰富札だ。ただし、もうひと組の六万枚の陰富札も、やはり鳥居たちが作っている。

偽ではあるが、筆跡も墨痕も同じだ。その意味では、どちらも本物だった。

揉めることは覚悟していた。自分も鳥居も、己が持っている陰富札こそ真の留札であると言い張るしかない。

どちらが真か偽か、誰にも決めることはできない。

七代目の芝居で鳥居を言いくるめるのです、と鶴松は言っていたが、それが難しいのは團十郎もわかっていた。

この陰富の賭場を仕切っているのは鳥居であり、鳥居の言葉が法となるのはどうにもならない。

(良くて半々か)

落とし所はその辺りだろう、と團十郎は考えていた。取り置き金の百万両、褒美金の二十万両、合わせて百二十万両を半分ずつ分け

る。それ以上は無理だ。

だが、うまくいくかどうか、と辺りを見回した。白山屋の伸輔をはじめ、ほとんどの者が苦虫を噛み潰したような顔になっていた。

松のハの七まで、留札の番号は定まった。つまり、留札になり得る陰富札はあと百枚である。

持っている者は、自分の他に河田景与がいるだけだ。顔色を見れば、それはわかった。

(だが、結局はあいつの持っている札も外れる)

その時、河田がどうするか。ましてや、團十郎と鳥居の二人が共に留札を持っているとわかればどうなるか。

すべてをイカサマと断じ、今回の陰富そのものを無効と言いつけるのではないか。当然、他の九人もそれに同意するだろう。

伸輔を除けば、全員が武士だ。刀はなくても、鳥居と自分を殺しかねない。百二十万両には、それだけの魔力がある。

無論、鳥居も備えは取っているだろう。襖の向こうには、与力や同心たちが控えているに違いない。万一の時は、賭け手たちを止めよと命じられているはずだ。

いずれにせよ、鳥居を含め、陰富に関わっている者たちは、事を大っぴらにできない。関わっていること自体が、幕法に反しているためである。



すべてを無事に終わらせるためには、一時的にとはいえ、鳥居と話を合わせなければならぬかもしれない。殺してやると念じるほど憎んでいた相手と呉越同舟ごえつどうしゆうというのは、皮肉な成り行きだった。鳥居からすべての金を奪い、素寒貧すかんびんにするというのが当初の狙いだったが、そうもいかねえようだ、と團十郎は舌打ちした。

すまねえな、鶴松。勘弁してくれよ。

一五

肩を叩かれて、鳶とびの五郎太は顔を向けた。周りに何百、何千の人々がいたが、誰もがそこに立っていた女に遠慮するように、少しばかりの距離を取っていた。

「背が高うたこござんすね」  
女が口を開くと、えも言われぬ香りが漂った。楓柄かえでの着物に香が薫たき染めしられているようである。

まさか、と五郎太は目を疑った。一年ほど前、加賀の豪商ぜにやこ銭屋五兵衛へえの息子に身請けされた花魁おいらんの九代高尾たかおではないか。

吉原でも最高位の遊女である花魁は、目明かし風情が買うことなどできない。

五郎太も名前だけしか知らないに等しかったが、一度だけ花魁道

中でその姿を見たことがあった。遠目からとはいえ、あまりの美しさに腰が抜けそうになったのを覚えている。

銭屋に身請けされたという噂や、神田の別宅で悠々自適に暮らしているという話は聞いていた。

天下の銭屋の息子の妾めかけである。金に不自由するはずのない身だが、なぜ湯島千両富の場にいるのか。そもそも、この女は本当に九代高尾なのか。

花魁道中はある種の顔見せで、髪形、化粧、着物など、すべてが特別あつち詠えである。言ってみればよそ行きの顔で、銭屋に身請けされた今の姿と違うのは当たり前だ。

しげしげと様子を見つめたが、間違いないようだった。なぜ、九代高尾がこんなところにいるのだろう。

お手をお借りしてもようござんすか、と郭くわく言葉で高尾が言った。「わちきも一度千両富を見とうござんした。所詮、花魁いせむと雖も郭くわく中では籠かこの鳥。外のことは話に聞くだけで、何も知りませぬ。旦那様だんなさまにお願いして、やっとの思いでここまで来たでありんすが、ここからでは遠くて何も見えませぬ」

天下の九代高尾である。断わる馬鹿はいないだろう。

五郎太は千両富の櫓うに背を向けて、しゃがみこんだ。両手を差し出すと、高尾がそこに足を掛けた。

「ああ、やっと見えやした」ありがとうござりんす、と高尾が礼を言った。「でも、これでは失礼やもしれませぬ。ぬし様も千両富を見物に来たのでありんしょう。富札もお買いでやんすか？」

いえ、と膝に力を入れたまま五郎太は首を振った。

「あつしは使いの者で、留札の番号を知らせるのが務め。見ていなくても構いやせん。ただ、番号がわかればいいだけの話でございやす」

九十九、と太鼓を打ち鳴らす音が響いた。その途端、周りの人々の歓声が高く、そして大きくなった。

「それなら、わちきが見てようす」高尾が五郎太の頭を押さえて、自分の帯の辺りで押さえ付けるようにした。「動かないでおくんなまし。わちきが転んで怪我でもしようものなら、旦那様にどれほど怒られるかわかりませぬゆえ」

合点がってんです、と五郎太は腕に力を込めた。高尾の着物の前が顔を覆っている。極楽とはまさにこのことだろう。

百、という神主の声と共に、周囲けんそうの喧噪が割れんばかりに大きくなった。

何も見えず、何も聞こえない。ただ、高尾の着物から馨かぐわしい香りがするだけである。

至るところから、叫び声が上がっていた。馬鹿野郎と叫ぶ者、泣

き叫んでいる者、雄叫びを上げている者。湯島天満宮の境内は祭礼のように盛り上がっていた。

よう見えおした、と高尾が地に足をつけた。

「ほんにありがとうござなんした。ぬし様のおかげで、ようやつと願いがかないました」

とんでもございやせん、と五郎太は首を振った。

「それで、留札の四つ目は何でございやしたか」

トにありんす、と高尾が宙に字を書いた。

「イロハニホヘトのトでありんした。はあ、何だか疲れて力が抜けるようでありんす。もしよろしければ、旦那様に挨拶をしていたければ……まったく、うちの旦那様ときたら、肝心な時にいなくなるなんて、ひどいお方でありんすよ」

高尾が微笑を浮かべながら、五郎太の手を握った。いけやせん、と五郎太は飛び下がった。

「あつしもちよいとやぼ用が……番号を知らせなければなりやせん。早くしないと面倒なことになりやす」

それならお引き留めはしませぬ、と高尾が手を放した。

「ご恩は忘れやせぬ。五郎太さま、お気をつけて行っておきなまし」

失礼しやした、と五郎太はその場から逃げるように離れた。高尾の色香に搦め捕られ、そのままついて行きそうになっている自分が

いた。

今は一刻も早く、奉行に卜の字を伝えなければならない。駆け出そうとした足が止まった。

(……おれは、てめえの名を名乗ったか?)

五郎太さま、という高尾の声が頭の中で繰り返されたが、どうでもいいとひとつ頭かぶりを振って、五郎太は先を急いだ。

## 十六

お葉ちゃん、という声に振り向くと、色白の美しい女が立っていた。

ここへ来たなら駄目って言ったでしょ、とお葉は白粉の匂いに噎むせて、何度かくしやみをした。

着慣れない絹の着物も、丸髻まるまげに結った髪も、何もかもがわずらわしかった。

そうは言うけど、と元九代高尾の銭屋吟子ぎんこが困ったような笑みを浮かべた。

「お葉ちゃんの頼みだから、着物も貸してあげたし、化粧も髪も整えたのよ。何かあったらと思うと、いても立ってもいられなくて……何のためかって聞いたって、ちっとも答えちゃくれないし」

「お吟さんは知らない方がいいの」

聞かなくなつてわかつてるよ、と吟子が小声で言った。

「今じゃ銭屋に身請けされているけど、一年前までは九代高尾の名前を張つてたんだ。水野様や鳥居様がどんなに酷いことをしたか、なか（吉原）の人ならみんな知ってるよ。余計なことは聞かないけど、できることなら何でもするって決めた。花魁にだって、意地っものがあるんだからね。だけど、その着物だけは気をつけておくれよ。京都から旦那様（ゆうぜん）が取り寄せてくれた友禪（ゆうぜん）なんだから、破れでもしたら大目玉だよ」

だいじょうぶでありんす、とお葉は微笑んだ。

「お吟さん、とにかくここを出ようよ。友禪（ゆうぜん）だか何だか知らないけど、あたしはいつもの緋（かす）の着物の方がいい。こんな上等な着物を着てたら、肩が凝（こ）ってかなわないよ」

似合うのにもつたいない、と吟子がため息をついた。

「お葉ちゃんほどの美人だったら、明日にでも花魁を張れるんだけどねえ」

柄（へ）じゃござんせん、とお葉は歩きだした。その美しさに驚いたのか、人の波（なみ）が引いていった。

松・ハ・七に続き、鳥居がトと文字を書いた。そりやそうだ、と團十郎は茶をひと口啜<sup>す</sup>った。

湯島千両富において突かれた札が何であれ、自分が持っている陰富札を留札にする、というのが鶴松の立てた策だった。

團十郎は松・ハ・七・トの空（〇）から九までの陰富札を手にしているから、次に何の数字が来たとしても大当たりは間違いない。

そして、最後の数字は九と決まっていた。手の中の札を並べ直し、松・ハ・七・ト・九を一番上にした。

くそ、という怒鳴り声と共に立ち上がった河田景与が、持っていた陰富札をびりびりと千切って放った。賭場に紙吹雪が舞った。

「惜しかった、外れじゃ」顔を真っ赤にした河田が勢いよく座った。

「他の者はどうだ。残っている者はまだいるのか」

最後の数字が決まっておりませぬと鳥居が言ったが、そんな話をしているのではない、と河田が吠えた。

「松・ハ・七・トの陰富札を持っている者はおるのか？ いなければ、取り置き金の百万両をこれまでの賭け金の多寡<sup>たか</sup>に応じて返すと、鳥居殿は申していたはず。そうであろう」

いかにも、と鳥居がうなずいた。誰も当たり札を持っていないのなら、これ以上は空しく刻を過ぎすのみ、と河田が畳を強く叩いた。「いるのであれば最後の数字が決まるまで待つしかないが、いないというならさつさと金を分けて、支払ってもらいたい。そうではないか、皆の衆」

その通りでございますな、と白山屋の番頭、伸輔が左右を見た。余計なことを、と團十郎は舌打ちした。

今、自分が留札になり得る番号の陰富札を持っていることは言いなくなかった。鳥居に怪しまれるだけだ。

だが、持っていないと言えば、後が面倒になる。嘘をついたのはどうということか、と河田をはじめ他の賭け手たちが問い詰めるに違いない。

どうすればいいのかと天井に目を向けた時、まだ他の当たり籤のこともありません、と鳥居がよく通る声で言った。

「後々、すべての番号について、知らせが入ることになっております。申すまでもなく、留札だけが当たり籤ではありません。一番籤をはじめ、十番ごとの富札、また組違い、数字違いにも褒美金が支払われます。それが決まるまで、算することはできません。たとえば留札を外したとしても、まだ他の支払いがあるのです」

そうであったな、と河田が慌てて破り捨てた陰富札を拾い集め始



めた。その様子に、殺気立っていた賭場の雰囲気が僅かに和んだ。  
團十郎は安堵のため息をついた。後は談志やお葉がうまくやって  
くれることを祈るしかない。

留札の番号が決まったら、その時こそがおれの出番だ。七代目團  
十郎、一世一代の芝居を演じてやろうじゃねえか。

## 十八

掏摸の疑いをかけられ、寺社奉行の詮議にあっていた勝蔵は、境  
内で群衆の整理に当たっていた与力、同心たちの口添えもあり、よ  
うやく放免されていた。

冬の陽はつるべ落として、申の刻夕七つ（午後四時）を廻ってい  
たが、辺りは暗くなり始めていた。

寺社奉行の番小屋から出てみると、雪がちらつき、境内のあちこ  
ちで篝火が焚かれていた。

放免されたはいいが、衣服がどこへいったのかわからない。与え  
られた筵を体に巻き付けていたが、寒さのあまり骨が鳴る音が聞こ  
えてくるほど、体が激しく震えていた。

（危うく間に合わねえところだった）

湯島天満宮本堂前の三段組の櫓の上で、九十六、と神主が声を張

り上げ、気合もろとも突き手が富箱に棒を突き立てた。刺さっていた札には三の文字があった。

もともと勝蔵は頭のひと文字を南町奉行所に知らせた後、湯島にとつて返し、最後の数字を伝える役割を任されていた。

掏摸として寺社奉行に突き出されたが、火消しの男に付き添っていた老人が、さすがに哀れに思ったのか、勝蔵の代わりに南町奉行所へ行って、頭の文字を伝えると請け負ってくれた。

勝蔵が本当に岡っ引きだとすれば、どんな因縁をつけられるかわからない。後難を恐れたということかもしれないが、伝えてはくれたのだろう。あんな人の良さそうな老人が、その場しのぎの嘘をつくとは思えない。

寺社奉行の詮議が長引けば、最後の留札の数字を知る由もなかったが、運よくその直前に身の証しを立てることができた。後はただ待つだけである。

筵一枚の姿で、人の波をかき分け、前に出た。風体の異様さに、誰もが目を背けたが、そんなことに構ってはいられなかった。

鳥居の命に従わなければ、何があってもおかしくない。自分の形相が険しくなっているのが、勝蔵自身にもわかった。

「九十九！」

神主が突き札を掲げた。記されていたのは数字の一である。

いよいよ、最後の留突きだ。これですべてが決まる。

勝蔵は富札を買っていなかったが、寒さを忘れるほど緊張していた。それは他の数万人の人々も同じだ。

それまでの喧噪が嘘のように、境内を静寂が満たしていた。

一定の間を置き、太鼓が三度打ち鳴らされた。留突きの合図である。

百、と神主が宣するのと同時に、突き手が富箱を突いた。

数万の人々がいるにもかかわらず、針が落ちる音さえ聞こえそうなほど静かだった。

錐の先から富札を外した神主の喉が鳴る音を、勝蔵ははっきりと聞いた。

「留札の数字は、四！」

周りから凄まじい声が上がった。大火事の時、炎が燃え盛る音に近い。

轟々と歓声こっしょうが飛び交い、隣の者が叫ぶ声さえ、何を言っているかわからないほどである。

「四だな？」

勝蔵は隣の男の肩に手を掛けた。間違いがあってはならない。念には念を入れて、確かめるつもりだった。

「何だって？」

男が耳元で怒鳴った。四と言ったなと怒鳴り返すと、大変だ、と男が目を丸くした。

「おい、聞いてくれ！ この人が留札を当てたぞ！」

違う違う、と勝蔵は何度も首を振った。

「そいつは勘違いだ。おれは最後の数字が四だったのか、それを聞いただけで——」

周囲にいた数百人ほどの者たちが、一斉に勝蔵に目を向けた。このお人が留札を当てたぞ、と隣の男が指さしている。

馬鹿、違うと叫んだが遅かった。あつと言う間に勝蔵の手、肩、足、尻に手が伸び、胴上げが始まった。

「わっしょい！ わっしょい！ 留札わっしょい！」

「よせ、離しやがれ、俺を誰だと思つてやがる！」

わっしょい、留札万歳という叫び声が重なり、勝蔵の声をかき消した。

留札が当たったという叫びに呼応するように、次から次へと人が波を作り、胴上げが続いた。

蹴鞠けまりのように人々の上を転がされ、目を回した勝蔵は気を失っていた。

そろそろでございましょうか、と鳥居は顔を上げた。続きの間の支度部屋で控えている蛭仁への合図である。

手を後ろに回すと、紙片が触れた。何十回、何百回と試していたから、間違いはない。

手を袂たもとに入れ、そのまま前に戻した。手のひらに十枚の陰富札が載っていた。

(これぞ総替ノ法)

かすかに頬が緩んだ。申の下刻(午後五時)である。湯島から勝蔵が最後の数字を知らせてくるはずの時刻になっていた。

手の中の陰富札の番号を確かめると、順番がばらばらだった。整理していた蛭仁にも焦りがあつたようだ。

松・ハ・七・ト、それに続き空、六、二、三、八、五、一、七、六、四。

間違いない。どの数字になったとしても、留札はこの中にある。

「まだか」

苛立ったように、河田が唸った。他の賭け手たちも、固唾を呑んで知らせを待っている。

頭の悪い奴らだ、と鳥居は心中で嘲り笑った。

あの連中が期待しているのは、すべての者が留札を外すことだ。

その場合は、取り置き金の百万両が今までの賭け金の額にに応じて戻ってくる。奴らの願いはそれだけだ。

間違つてはいない。湯島千両富では六万枚の富札が売りに出されている。

その中でたった一枚しかない留札を当てることなど、奇跡以外の何物でもないという考えは正しい。

だが、奴らは間違っている、と鳥居はつぶやいた。この陰富を取り仕切っているのが、鳥居耀蔵であることを忘れている。

百万両という巨額の取り置き金を、むぎむぎ返すような甘い男だと思っているのか。そんな馬鹿な連中が騙されるのは、当然といえば当然の話だ。

頭の悪い者ほど欲を掻く、と鳥居は冷笑を浮かべた。目先の損得に心を乱され、冷静な判断ができなくなる。

損をすれば、取り返すために足掻く。それがまた損を大きくすると、なぜわからないのか。

馬鹿で無能な者どもに、金など無用である。知恵なき者に力はない。こいつらから金を奪って、何が悪いというのか。

鳥居に良心の呵責はなかった。この世には二通りの人がいる。奪

う者と奪われる者だ。

そして、自分は奪う側の人間である。冥みよう加金がと違って、金を絞り取ればそれでいい。

「失礼致します」襖の向こうで大迫の声がした。「たった今、湯島天満宮から使いの者が——」

前置きはいい、と立ち上がった河田が襖を大きく開いた。大迫が廊下で平伏していた。

「最後の数字は何か？ 構わぬ、申せ」

九にございます、と顔を伏せたまま大迫が言った。となると、と河田が向き直った。

「留札の番号は松のハの七のトの九。その札を持っている者はおるのか」

もう一度番号を、と鳥居は居住まいを正した。

驚きの表情を浮かべた河田が、まさか、と叫んだ。

「鳥居殿、その札を持っておられるというのか」

笑みを浮かべて、鳥居は手にしていた十枚の陰富札を掲げた。

その時、僧法良が奇声を上げて立ち上がり、腰が抜けたようにへたり込んだ。

「法良殿、どうなされた」

声をかけた伸輔に構わず、法良が手足を振り回し始めた。騒ぐな

と叫んだ鳥居に、法良が一枚の陰富札を向けた。

二十

「あ、あ、あ、あ、あ、あ」

團十郎は口中に溜めていた唾を飛ばしながら叫んだ。歌舞伎ではよく使う手である。

どうした、と横から覗き込んだ伸輔の額に、陰富札を押し当てた。

「当たったあー！」

その場にいた全員が立ち上がった。まさか、という声が重なったが、そこは舞台で鍛えた喉である。

誰にも負けぬほどの大声で、当たった当たったと騒ぎ立て、一人ずつに自分の陰富札を見せて廻った。

考えに考え抜いた末、これしかないと思いついたのはつい先刻である。

鳥居も当たり籤を手に行っているはずだが、それより先に自分の陰富札が当たりだと叫び、全員に番号を確かめさせる以上に、説得力のある芝居はないだろう。論より証拠とは、まさにこのことである。

「こいつはたまげた」驚き桃の木山椒の木、と伸輔が唱えた。「お武家様方、法良様の札をご覧ください。確かに松のハの七のトの九。



寛永寺の法良様が留札を引き当てましてございます！」

改めて團十郎の陰富札の文字と数字を確かめた河田が、ううむと唸うなったきり、口を閉じた。他の者も同じである。

起きるはずのない奇跡を目の当たりにして、誰もが言葉を失って  
いた。

「信じられませぬ。これも寛永寺開基徳川家光公、開山住職かいざん てんかい天海法師、ご本尊の薬師如来の御加護やくしによらい ごかこでございましょう。いや、まさか

こんなことが起きるとは……自分でも信じられませぬ」

摩訶般若波羅蜜多心経まかほんにやほらら みたしんきょうじぎょうほさつ自在菩薩般若波羅蜜多、と般若心経を唱えながら両手を合わせた。

團十郎自らが定めた歌舞伎十八番の中に、僧侶が登場する演目は  
少なくない。例えば「蛇柳じややなぎ」の弘法大師こうぼうだいしがそうである。

それだけでなくても市川家は初代から成田山新勝寺なりたさんしんしょうじと縁が深い。新勝寺は真言宗の寺だが、般若心経は仏教の各宗派が使う経だから、  
團十郎も空で唱そとえることができた。

「とにもかくにも、すべてはご本尊のおかげ。袖摺りそでず合うも多生の縁と薬師如来様も申しております。せっかくの授かり物でございませぬ。皆々様にも福の御裾おすそ分けをさせていただければと……ええと、取り置き金の百万両、そして褒美金はいかほどでございましてしょう。いやいや、ご遠慮

には及びませぬ。天から授かった福をお分けしなければ、それこそ天罰が当たります」

括舌かっせつの良さも、歌舞伎役者ならではの芸である。息もつかせず喋り続け、全員に金を分けると言ったのは、場の雰囲気や味方につけるためだった。

ここで揉めれば、刻が過ぎていくばかりである。鳥居が手配した目明かしたちは、談志やお葉が足止めしているはずだったが、それにも限度があるだろう。

賭け手たち全員に、團十郎の陰富札が留札だと認めさせる方が先だ、というのが團十郎の思案だった。そのためには、多少の金を渡すのもやむを得ない。

「さて、いかほどとなるのか、数えるだけで陽が暮れそうですが、それはおいおい考えるとして、とりあえずは皆様方も猪口をお取りください。わたくしと一緒に心を一つにして、般若心経を唱えていただければ、今後薬師如来様が皆様方をお守りになられるであります。よろしゅうございますか、それでは——」

待て、と鋭い声が出た。

そりやそうだろう、と團十郎は顔を上げた。顔の色を真っ白にした鳥居が立ち上がっていた。

「法良殿、いや法良、いや七代目市川團十郎。よくもたばかってく

れたな。他の者はともかく、この鳥居耀蔵の目はごまかせぬ。どのようなイカサマを使ったかは知らぬが、お前が当たり籤を持っていることなどあり得ぬ」

とつくにお見通しかと胸の内つぶやきながら、何をおっしゃいますと團十郎はゆつくり首を振った。

「鳥居様、それは言い掛かりというもの。わたくしが留札を持っているのは、皆様方も見ております。そうでございますよう？ 留札の番号は松のハの七のトの九。これこの通り、わたくしの手の中にございます」

イカサマだ、と鳥居が叫んだ。

「それが証拠に、私も留札を持っている。これこそ真正銘の当たり籤」

懐から取り出した十枚の陰富札を、鳥居が隣にいた河田に渡した。「お確かめあれ、河田様。三日三晩浅草寺でお百度参りを繰り返し、身を清め、齋戒沐浴さいかいもくよくしていた時、天啓てんけいが閃ひらめいたのです。頭に浮かんできたのは松、ハ、七、トの四文字。最後の数字こそ見えませなんだが、それならその段の陰富札をすべて買えば、必ず留札が当たると信じ——」

鳥居殿、と河田が片手を挙げて制した。

「鳥居殿の申された通り、ここに十枚の陰富札がある。松のハの七

のト、その段の番号が並んでいる。だが、肝心の九がない」

何を馬鹿な、と鳥居が甲高い声で叫んだ。なぜだ、と思わず團十郎も怒鳴っていた。

鳥居が総替ノ法を使い、留札の陰富札を手にするだろうことはわかっていた。河田が言ったように、その段の十枚があることから、それは確かだ。

だが、末尾の九の数字がその中にないという。いったいどういうことなのか。

河田から十枚の陰富札を取り返した鳥居が、番号を目で追った。顔色が白から青へと変わっていった。

(うづく)